

特集 就活に必要なのはIQ・EQよりも“CQ”

知能の高さを示す指数として「IQ」、人付き合いや感情コントロールのうまさを表す指数として「EQ」が使われているが、どちらもプレイヤーとしての優秀さを表す指数。どんなに優秀なプレイヤーでも、1人では打開できない場面は出てきてしまうものだし、周囲の環境によって能力の何%を発揮できるかわ変わってくる。そう考えると、就職活動とその後のキャリアを考える上で、もっと重要な“指数”があるのではないだろうか。就職活動を始める前に意識してほしい“指数”とはどんなものか。そしてその“指数”を高めるには、どうすれば良いのだろうか。

**IQでもなくEQでもない。
成功のためには、CQが必要だ**

大学まではIQ（＝知能指数／intelligence quotient）が重要だが、大学を卒業して社会に出るからはEQ（＝感情指数／emotional intelligence quotient）が重要になるという説がある。頭の回転・理解力がいくら良くても、会社では成功できない。自分の感情を巧みにコントロールできたり、対人関係をうまく構築できたりすることがビジネスでは鍵を握るとして提唱されたのがEQという概念だ。

どれだけ正論を説いても、キーマンが首を縦に振ってくれないと物事は進まないのが会社組織。逆にどれだけ愚論でも、Yesと言わせればその主張は通ってしまう。あるいはどんなに良い商品を作っても、どんなに商品の良さを説明しても、売れるとは限らない。それよりも相手に欲しいと思わせることができれば、競争相手の商品より劣っていても商品は売れる。ビジネスというのはそういうものだから、いくらIQに優れた人物でもEQがないと企業ではまったく活躍できないというケースはしばしば見受けられる。

ただ、ちょっと待ってほしい。これから就職活動を迎えるのなら、EQよ

りも重視すべき指数がある。IQ、EQに比べて名付けるなら、CQ。とも呼んでみようか。望ましいキャリア（＝goals）を構築していく力、すなわち、CQ。がIQよりもEQよりも価値を持つてくるのだ。

**活躍するには、自分が主役の時
に勝てる場所を選ぶこと**

プロ野球を例にして考えてみよう。実力が同じ2人のピッチャーが居たとする。入団したのは1人が常に首位争いの金満球団、もう1人は最下位が常連の貧困球団だ。2人の実力が同じでも、1人は鉄壁の守備に強力打線の援護があるが、もう1人はエラー連発の上に貧打で孤立無援。貧困球団に入ったピッチャーの方が多少優れていたとしても、どちらが勝って稼げる投手になるかは考えるまでもないだろう。

プロ野球選手になりたいからといって「12球団OK」とは言わずに、自分が投げる時に勝てる球団を選ぶこと。ただ、現在1位の球団が、自分が投げる時に1位に居るとは限らないということを忘れてはならない。満を持して自分がマウンドに立った時にチームはどうか、将来性も考えよう。

もっと重要になるかもしれない点は、

自分が1軍に上がるころには、プロ野球よりも競輪の方が人気のスポーツになっているかもしれないこと。だったら今はマイナーなスポーツでも、競輪を選んだ方が賢い選択かもしれない。

**勝ち馬に乗る。
時には馬でなく車を選ぶべきかも**

前振りが長くなつたが、就職活動でも同じことが言える。これまでの専攻なども踏まえて就職先を考える理系学生も多いのだろうが、「自分の育んできた能力をどれだけ発揮できるか」だけではなく、「自分が能力を発揮するかもしれない企業の将来性はどうか」、さらに言うなら「その企業が属する業界の発展性はどうなのか」という点も考えないといけない。どんな大企業も、どんなに元気のあつた業界でも、いつかは衰退するもの。40歳を過ぎてから、自社が落ち目だからと給料カットに残業タツプリでは泣くに泣けない。

就職先を選ぶ時には、勝ち馬を見抜く目を持つこと。さらに言うなら、馬よりも車が主な移動手段になる可能性があるのなら、勝つのが馬か車を正確に見抜く目を持つこと。メーカーに就職すると決めていたとしても、当初考えていたとは別の分野でああなたの

IQ

動作性IQ

言語性IQ

言語理解

知覚統合

処理速度

作動記憶

EQ

心内知性

対人関係知性

自己認識力
ストレス共生
気力創出力

自己表現力
アサーション
対人関係力

CQ

先見性

自己認識

業界展望予測
企業将来性予測
職種需要予測

能力把握
適性把握
価値観把握
人生観把握

専門性を評価してくれる将来有望な企業があるかもしれない。

とはいえ、「車の次はセグウェイだ!」
と思っても、夢物語に終わるかもしれない。プロ野球の球団にしても、名門球団は一時的に順位を下げて、再び上位の常連に返り咲く可能性は十二分に残っている。「流行だから」と一時のブームに踊らされずに業界・企業の本質的な強さを考えることも大切だ。

もっとも、そうは言っても一朝一夕に「見抜く目を持つ」ことは難しい。研究室の先輩やOB訪問先の人からの意見に耳を傾けることも重要だろう。

勝つことだけがすべてではない。

「自分の望むもの」を理解しよう

「勝つ」「勝つ」と繰り返してきたが、勝つことだけがすべてではない。業績好調な企業は自然と明るい雰囲気になるものだし、不景気な企業は雰囲気も暗くなりがち。「勝つ」ことが重要な要素の一つであることは間違いないが、地球球団のエースとして記憶に残る生き方を選ぶのも生き様。多少は不便だったとしても車より馬の良さにこだわりたい人も居るだろう。

仕事のやりがい、自分の能力・適性とのマッチング、自分のかかわる仕事

が社会に与えるインパクト、社会への貢献性、職場の上司・同僚の能力や人柄、その企業で働くことによって得られる社会的なステータス、得られる報酬、拘束される時間、子育てへの支援体制……重視したい要素を数え上げていくと、かなりの数になるはずだ。

すべてを満たしてくれる100点満点の会社とはめったに出会えるものではない。だから、重要と思う要素の中でも優先度を付けながら業界・企業・職業を探さなくてはならないのだ。

仕事にするか趣味にするか。

冷静に一度考えてみよう

重要視すべき要素の一つとして、業界・職種にこだわって就職先を探す人は多い。良く「好きなことを仕事にしたい」と言って、クリエイティブな仕事や興味を持ったことにかかわる仕事を探す人も居るが、好きなことが仕事になったら「好きなこと」が「嫌いなこと」になってしまうこともある。

仕事と生活のバランスを取ろうというところで「ワークライフバランス」という概念が注目されているが、「好きなこと」についてもワークライフバランスを考えてみよう。「好きなこと」にどれくらい没頭したいのか。仕事にする

か趣味にするか、場合によっては半々くらいの割合にするのか。一度は冷静になって考えてみよう。

言い方は悪いが、たとえ「好きなこと」の業界に入れなかったとしても、負け組の企業に就職しても、本人さえ満足できる人生だと胸を張れるのなら、それに勝つことはない。ほどほどの時間に帰れて趣味に時間を費やせる、会社の人からは必要とされて社長や上司からは目を掛けてもらえる。そんな働き方・生き方も幸せかもしれない。

大学受験にはかなりの時間・パワーを費やしたのに、就職活動には大して時間を掛けずに済ませてしまう人を良く目にする。就職水河期だから、まずは1社から内定をもらうことを考えるだろうし、それで満足してしまうかもしれない。だが、人によっては30〜40年も同じ会社で働くことになるのだ。研究も大事だろうが、就職活動は今後の人生を間違いなく大きく左右する。悔いのない就職ができた満足できるように、できる限り本気でキャリアについて考えて、就活に取り組んでほしい。

IQ、EQも大事だがCQも重要になるということについて、分かってもええただろうか。次ページからは、これから就職活動までできるCQの伸ばし方について見ていこう。

特集 就活に必要なのはIQ・EQよりも“CQ”

業界や企業の将来性を見抜く能力、自分の適性・望みをしっかりと把握して最適な就職先を考えられる能力。CQはそうした能力を総合した力だと言える。これから本格的な就職活動を迎える秋までに、CQを伸ばすためにはどうすれば良いのだろうか。いくつかCQの向上に役立つと思える事柄を取り上げていこう。

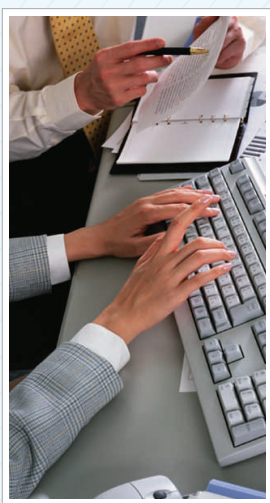
職場体験型インターンに参加して 自分が働くイメージを持とう

CQを上げるために、時間はかかるが一番効果を発揮するのは職場体験型のインターンシップに参加することだ。実際に働いている現場に身を置くことで、普段の業務がどんなものか、身を持って感じる事ができる。

研究者として働くとはどんなことか、プログラマーとして働くのにはどんな能力が求められるのか、あるいはまったく関係のない営業の仕事とはどんなミッションを負うものなのか。そうしたイメージでしか持っていない「仕事」を体験することで、自分が働くイメージをはぐくめて、働き始めてから「こんなはずじゃなかった」と嘆くリスクを低減できるだろう。

職場体験型のインターンに参加するメリットは、仕事に対するイメージを持てることだけではない。一緒に働く先輩社員の姿を通して、10年後、20年後の自分の姿を想像することができるし、仕事の間に交わされる会話からは仕事に対する充実度・誇り・今後の将来性などを垣間見られるはずだ。

さらに、先輩社員と仲良くなれたら、突っ込んだ質問をしてみると良いかもしれない。業界内でその企業はどんな立ち位置なのか、ライバルはどこか、業績を伸ばしている企業は、今後の浮沈の力ぎを握るのはどんな要素になるのか。包み隠さず話してもらえるような関係を構築することが先決だが、正面から質問をぶつけることで、見えてくることもあるだろう。

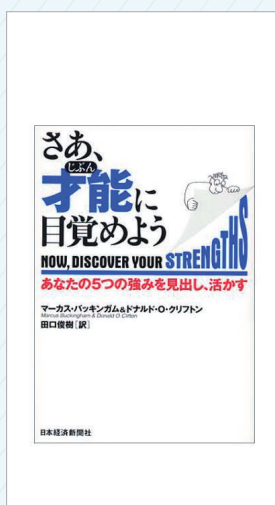


診断テストなどにもトライして 本格的に自己分析をしてみよう

皆さんは自己分析をどのように進めようと考えているだろうか？ 向いている企業や職業を考える上で自己分析は非常に重要だが、過去の自分を振り返って「私はこんな人間だ」と分析するだけで済ませようとする人も意外と多い。人間は、思っている以上に自分のことを正しく理解できていないもの。信用し過ぎること、頼り過ぎることはどうかと思うが、自己分析のために自己診断テストを試してみても良いかもしれない。

Webで「自己分析」と検索するだけで無料の診断プログラムがズラリと出てくるが、無料のものは得てして精度が低かったり、何かの商材購入につなげようとするものだったりする。多少の金額は投資と思って、一つは有料のテストを受けてみることをお勧めしたい。

一押しは「さあ、才能に目覚めよう」（日本経済新聞出版社）。書籍を購入すると、自分の強みが分かる「ストレンジスファインダー」という診断テストを受けることができる。経済評論家の勝間和代氏も推薦の良著で、34種類の強みの中から、自分に当てはまる上位5つの強みを判定してくれる。正確には、強みではなく志向性が分かるというテストになるのだが、「想像もしていなかった強みが挙げられて驚いたが、思い返してみると当たっている」とは実際に受けてみた知人の談。1680円で試すことができるので、興味を持っていただけなら、ぜひ試してみたい。



CQを上げるために今夏やっておきたいこと

就職情報誌からの情報だけに頼らず 経済誌なども情報源にしてみよう

業界研究・企業研究といえば、手軽にできるのが就職情報誌。学生向けに分かりやすく書かれているものが多いため、入門編としては最適だろう。

ただ、就職情報誌からの情報だけで済ませてしまっているようではCQを上げられない。就職情報誌では語られていないさらに深い情報などを探るためには、経済誌などにも手を出してみた方が良さそう。

経済誌にチャレンジする前に、まず抑えておいてほしいのが『就職四季報』（東洋経済新報社）だ。採用企業からの広告費を一切もっていないというので、掲載されている情報は信頼できる。「入社3年後の離職率」「有給休暇の取得状況」といった就職情報サイトには載せられない生の情報が掲載されているので、就職掲示板の情報などに踊らされず、正確な情報を手で取れるだろう。

経済誌の種類にもよるが、専門誌だからといって正確な情報や自分が得たいと思っている企業の情報が載っているかどうかは分からない。上場企業への就職を考えているのなら、証券会社が出しているアナリストレポートに目を通してみるのも良いかもしれない。手軽なところではYahoo!ファイナンスの有料サービスでライターによる業種・銘柄レポートを月額1449円でチェックできる。EDINETというサービスを使えば無料で有価証券報告書を見ることができるので、そちらを使うのも一つの手だろう。



キャリアコンサルタントに 腹を割って相談してみよう

ここまでいくつかCQを上げるための手段を書いてみたが、手っ取り早く、即効性のある手段を挙げるとすれば、キャリアに詳しい社会人に相談すること。研究室の縁をたどって、OB訪問で実際に働いている先輩に話を聞けるのは就活生の特権。気後れせず積極的に試してみてもどうだろうか。

OB訪問だけでは満足できない、あるいは研究室の縁が活かせそうにないというなら、キャリアコンサルタントに相談するという道もある。

理系ナビもキャリア相談というサービスを提供しているが、キャリア相談のためにオフィスまで足を運んでもらえれば、理系のキャリアに詳しいキャリアコンサルタントが過去の動向から最新の業界事情まで、親身になって話してくれる。

理系ナビのキャリアコンサルタントは、毎年何百人という理系学生と会っているだけに、どんな志向性の持ち主にはどの業界・職種が向いているか、どんな性格・能力の学生がどの企業から内定をもらえているか、客観的な立場から有益なアドバイスや情報提供ができるはずだ。今、自分に欠けていて、早急に身に付けなくてはならないCQの要素は何か、的確な指摘を受けることもあるかもしれない。

もちろん、キャリア相談でお金は掛からない。無料のサービスなので、時間の都合が付く限り、利用してみてもいい。

